

自動車メーカーや銀行や商社に入社することを就職と言いつのに、農業を仕事に選ぶことは就農と表現する。農業を他の産業と切り分けるこの言葉を、いつか使わなくなる日が来ると思わせる就活イベ

けいざい 解説

ントが開かれた。2月23日、東京都千代田区の官庁街にある霞が関ビル。「求めているのは経営者になりたい人。家庭菜園をやりたい人ではない」「だれもやっていないことをやるのが戦

進化する農業経営

略。市場を創造する」。農業法人のトップたちが経営を説明した。続いてリクルートスーツ姿の学生たちが質問に立った。「東大の大学院生です。海外生産は始めていますか」「早大です。受注してから生産するやり方でリスクはありませんか」。質問も、栽培ではなく経営に関するものばかりだった。他産業と見まがうようなこの就活イベントで、2つのことが浮き彫りになった。一つは農業界が新卒を採用する時代が来たということだ。「会社が大きくなるとトップの目が行き届きにくくなる。代わりにマネジメントができる人間が

市場創造へ新卒求む



農業法人のトップを囲む就活生(東京都千代田区)

必要になる」。ジャガイモやトウモロコシを生産するさかうえ(鹿児島県志布志市)の坂上隆社長はこう語る。参加した農業法人の多くは、霧細な家業から企業経営に成長してきた。売り上げは数億〜数十億円になり、社員も雇えるようになった。だが大半は他の産業から転職した

中途採用だった。いまはその先に進む段階。新卒を採って育て、経営の理念と手法を共有する。その結果、いかに創業者が退いても、会社が継続することが「坂上氏」可能になる。学生側も企業化する農業に期待する。イベントを主催したコネク・アグリフード・ライズ(東京・港)が、学生に参加理由を聞くと「成長性に魅力を感じた」との答えが返ってきた。イベントで明らかになったもう一つの点は、品々は転作補助金を含め様々な助成があるが、野菜にはほとんどない。コメの関税は80%近くあるのに対し、野菜は数%と低く、外国産との競争にさらされてきた。手厚く保護するから、コメ農家はなかなか経営転換しなかった。その結果、何が起きたか。10戸当たりの所得は水田が年3万円、野菜のハウス栽培は同18万円。厳しい環境が野菜農家を鍛え、経営を向上させた。貿易自由化交渉でも生産調整(減反)の廃止でも、農政はいまもコメ農家をどう守るかばかりに腐心する。それを続ける限り、ふつうの産業へと進化する農業経営からコメが取り残される。(編集委員 吉田忠則)